

On Machiavelli's Concept of Virtú

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47650

マキアベリのVirtù の概念について (研究その4)*

— N. Wood教授の再論を中心として、 —

木 田 朝 男

A true political philosophy……can not advance a step without first paying
homage to the principles of morals…… (I. Kant) (tr.)

まえがき

マキアベリの著作における Virtù の概念については既に「マキアベリ研究その1」において、F.ギルバート教授の解説を簡単に紹介したつもりである²⁾。しかしこの概念がマキアベリの思想——史論、政治論などの中心概念であることを思えばなお一層の研究が望まれる。思うにこの概念は *Necessità* (自然法則)、*Fortuna* (歴史法則) を受けとめる彼の人文主義的立場を表明したものである。

本稿は N. Wood 教授の綿密な原典研究に依拠しつつマキアベリの古典的市民=戦士精神への願望、復元の努力をたどり、さらにまたイタリア・ルネッサンス末期における彼の時代観、人間観をも併せて解明出来ることを望んでいる。

本稿のメリットは全面的に N. Wood 教授の分析に負うている。

末尾の補足は未発表の旧稿の一部である³⁾)

(注1) N. Wood., *Machiavelli's Concept of Virtù Reconsidered. Perspectives on Political Philosophy*. Vol. 1. 所収1971.

(注2) F. Gilbert., *Machiavelli & Guicciardini*. 1966.

(注3) J. W. Allen. *A History of Political Thought in the 16th Century*. 1960.

序

マキアベリの *virtù* をめぐる問題について N. Wood 教授は次のようにいう。「マキアベリの *virtù* の用法の問題については多くの論文が発表され、その中には啓発的なものも幾つかあったけれども、この概念の用法の研究などによってそれを厳密に評価することには余り努力が払われなかった。このような分析は将来に期待されるであらうが未だ時期尚早である。さらに *virtù* とマキアベリの思想のその他の要素=概念との関係の正確さを熟考して、彼の全体的な知的展望におけるその役割を求めようとした学者は殆んどなかったように思われる¹⁾。」

virtù 論におけるこのような分析の欠如の中で注目すべき例外として教授は J. H. Whitfield のすぐれた論文「*virtù* の解剖」を挙げている²⁾。Whitfield の結論は精密な言語学的研究に基づいているとして彼の結論を教授は次のように紹介される。即ち、DeSanctis にはじまった最も一般的解釈によれば *virtù* は善悪いづれの目的にも使用される精神力である³⁾。DeSanctis およびその一派はこの立場を固執して、マキアベリは道徳的な徳目を放棄したと言明している。これに対して Whitfield は先づそれはマキアベリの立場の正確な説明ではなく、次に彼の諸著作の中には *virtù* の単一の解釈は発見されず、また彼の言語の使用は的確でも

系統的でもない批判して次のように主張している。即ち *virtù* の曖昧さはマキアベリがこの用語に与えた多義性に由来し、これをある単一の包括的な意味で表現することは出来ない。ある場合にはマキアベリは悪 (*vizio*)、極悪 (*vilta*) の反対語として *virtù* を有徳として用い、あるいは悪 (*cattivo*)、邪悪 (*tristo*) と反対に道徳的善を意味するためには善 (*bontà*)、善行 (*buono*)、誠実 (*onesto*) のような他の用語を使っている。*virtù* の対語として最も多く使われているのは運命 (*fortuna*) であるが反対語としては怠惰 (*ozio*)、狂気 (*furore*) が用いられる。さらにマキアベリは *virtù* を生命力という今日の生物学的名辞にたびたび使っている。*virtù* はまたしばしば勇氣とか勇敢の代りにも用いられる。終りにマキアベリは *virtù* をラテン語の *virtus* 即ち意志力、男性的なもの、美德のように用い、また *virtù* の複数形をラテン語の複数形 *virtutes* 即ち善行または善性に対応させている。これら両者のうち後者の方がマキアベリの著作の中ではより安定した用法であるらしい。さらに付言すればマキアベリはキケロによる *virtù* の特定の使用を模倣したかのようにキケロと同じ意味、即ちある種の「断乎たる決断力」(これはダントの解釈によるが)に使っている。中道、優柔、不断、無気力に対するマキアベリの有名な軽蔑が出るのはそのためである。しかし彼は常に精力の悪用よりも公共善への貢献というような精力の善用をすすめている。このように Whitfield はマキアベリの意味の評価の困難さと落とし穴の幾つかを簡単に指摘している。

マキアベリの *virtù* の用法は頗る曖昧であり、簡明な公式ではその意味は正しく評価され得ないという点では Wood 教授も Whitfield とは元より同意見であるけれども、さらに教授はその意味の多様性にも拘らず特定の意味を指示することを論証しようとする。この仮説を進めるために教授はマキアベリの「*virtù* の人」の一覧表を作り、そこから得た結論をマキアベ

リの *virtù* の本論である「戦術論」(*Arte de' guerra*) の中で実証したのである。

(注1) N. Wood., *Op. Cit.*

(注2) J. H. Whitfield., *Machiavelli*, 1947.

(注3) F. DeSanctis., *History of Italian Literature*(tr. 1931)

I N. Wood教授の分析

さて、教授はマキアベリの「君主論」と「ローマ史論」の中から特に有徳者として挙げられた53名の一覧表を次の通り掲げている。(勿論見落しを覚悟の上ではあるが。)

Aemilius Paulus	Gonzalo de Córdoba
Aeneus	Hannibal
Agessilaus	Hiero
Agathocles	Horatius
Alexandros (大王)	Julius Caesar
Antonius Primus	Junius Brutus
Aratus	Lycurgus
Camillus	Manlius Capitolinus
Carmagnola	Manlius Torquatus
Cesare Borgia	Marcus Antonius
Cincinnatus	Marcus Aurelius
Coriolanus	Marcus Cato (大)
Cyrus (大王)	Marcus Cato (小)
David	Mohamet (トルコ)
Decius Mus (大)	Moses
Decius Mus (小)	Mucius Scaevola
Dion	Oliverotto d' Fermo
Epaminondas	Ottaviano Fregoso
Fabricius	Papirius Cursor
Francesco Sforza	Pelopidas
Philippus (マケドニア)	Tempanius
Pompeius (大)	Themistocles
Regulus Atilius	Theseus
Romulus	Timoleon
Septimius Severus	Tullus Hostilius
Scipio Africanus (大)	
Solon	Valerius Corvinus

以上の一覧表から次のような幾つかの推論を出している。

先づ、この表は「君主論」「ローマ史論」の一般読者に最もおなじみの名前と一致し、マキ

アベリの英雄達は主として古代人ということである。彼の同時代人で「*virtù* ある人」は僅かに6名に過ぎない。即ち、ミラノとベニスに仕えた有名な傭兵隊長であるカルマニョーラ、法王アレクサンダー6世の不義の子で才気煥発にして抜群の兵士チェザーレ・ボルジア、ミラノ公国の建設者スフォルツア、ナポリの征服者でスペイン人のコルドバのゴンザロ、フェルモの僭主オリベロット・ユーフレドッチ、ゼノアの愛国者オッタピアーノ・フレゴージである。

(Princ., VII, 22; et al.)

次に、古代人のうち半数以上はローマ人であり、古代ローマ人はいずれの国よりも多くの *virtù* を持ったというマキアベリの見解と全く一致する程圧倒的である。

第三に、ローマの英雄の大多数は第一回ポエニ戦争以前の人であり、それ以後は次第に腐敗が始まったとマキアベリは信じている。これと同様にローマ人以外の古代人の多くもそれ以前の人である。以上二つの事実からだけでもマキアベリがローマ帝政以前の古代地中海世界に *virtù* が集中していたと信じたことがわかる。

第四に、当面の問題にとって最も重要なことは古代近代のいずれを問わず、これらの英雄達は行動人であり、哲学者や学者ではなかったという事実である。後者の部類に入れてもよいと思われる人はマルクス・アウレリウスとソローンだけである。マルクス・アウレリウスは非常に困難な実際問題に直面し、また戦場ではその軍隊を勇敢に指揮した有能な政治家でもあった。ソローンは市民にして戦士であり、野戦の指揮官でもあり、また文人にして政治家であった。

最後にこの表の人物はすべて単に行動人であるばかりではなく特殊なタイプの行動人である。即ち、戦士、兵士、将軍である。前述のマキアベリの同時代人6名は皆この部類にはいる。ローマ人以外の軍人ではハンニバル、マケドニアのフィリップ2世、アレクサンダー大王がある。ローマの英雄達は本来市民＝戦士であ

り、その中にはスキピオ・アフリカヌス、ユリウス・カエサルのような名戦術家がいる。

さて次には、マキアベリは一覧表の人物の *virtù* に優劣の差等をつけているかどうか。もしそうであれば優の人物は誰だれであり、また彼等はいかに記述されているか。

表の人物の中には単に「*virtù* ある人」もあり、また *virtù* に横溢しているために、あれこれの非常に危険な仕事を巧みに完遂することが出来る人もいる。最高級の *virtù* は少数者である。後者のグループに属する人は偉大な建国者達、即ちモーゼ、キルス、ロムルス、テセウスである。マキアベリが個人の *virtù* と腕で建国された新しい国家を論ずる際にはこれら4名の建国者を最大の偉人達 (*li più eccellenti*) であると主張している。(Princ., VI, 18—19) 「ローマ史論」にも彼等の美德 (*eccellente virtù*) についてふれている。即ち、先の4名のうちロムルスのみが語の厳密な意味での「*virtù* ある人」であり、ロムルスの功業とその永遠の栄光はよく分析されているのに対してモーゼはついでに引合いに出されたのに過ぎない。(Disc., 1, i, 92—93; et al.) これらの建国者について、*virtù* の点では劣るけれども次の3名の異色ある軍事指揮官がある。それはカミルスとそのあっぱれな仇敵スキピオ・アフリカヌスとハンニバルである。マキアベリはカミルスこそは最も高名なローマ人であると主張する。即ち、ローマは紀元前392年にガリア人の侵寇という外部から運命の打撃を受けて初期の腐敗を免れ、またそれによってローマはその本来の原則に立戻った。この災厄に際して市民同志を奮起させて共和国ローマを救ったものこそカミルスの *virtù* である。(Disc., 1, viii, 113)

マキアベリはカミルスの軍事的 *virtù* を引用して再度彼の *virtù* と道徳的善 (*bontà*) にふれて、彼を善 (*buono*) と賢明 (*savio*) と断定する。(Disc., III, i 310; et al.) また、彼をマキアベリはローマの指揮官中で最も深慮遠

謀の人と呼んでいる。(Disc., III, xii, 354) スキピオとハンニバルは共に異常かつ過度な *virtù* の持主である。(Disc., III, xxi, 369—370) 「ローマ史論」にはスキピオの深慮とその他の有名な諸徳が力説されている。(Disc., I, xxix, 157) ハンニバルは人情味あるスキピオとは全く対照的に無慈悲な残酷さにも拘らず無限の *virtù* を持つといわれる。(Princ., XVII, 55) 次に *virtù* は抜群であるがカミルス、スキピオ、ハンニバルには劣る3名のローマ人のうち2名は軍の指揮官トルクアツスとコルピヌスであり、他の1名は皇帝セベールスである。(Princ., XIX, 64; et al.) 以上の「*virtù* ある人」の中の最高の「*virtù* ある人」である10名は皆戦士である。即ち4名は建国者であり、キルスを含む5名は名指揮官であり、残り1名皇帝セベールスは最も専制的であったが政権を奪ってこれを終生保持した異才ある兵士である。

さてそれでは *virtù* を欠いた人は誰かという前記の分析からは不明である。というのはマキアベリの著作中からはこのような一覧表を作ることは出来ないから。繰り返して言うが先の表はマキアベリが「*virtù* ある人」として特記した人だけを掲げたのである。だからそう特記されていないからといって著作中のその他多数の人物を皆 *virtù* を欠く人であると彼が考えたと思うのは全くの誤りであらう。彼は小心の著作者ではないのでその科学的論文はこのように読まれてよい。また、彼が「*virtù* ある人」と考える幾人かの名前を挙げるのを忘れたことも確かである。さらに何びとも絶対に *virtù* がないとかあるとかではなく、この両極端の間には *virtù* の各種の段階がある。例えばAはBよりも *virtù* があるがCよりも少いからといってAもBも *virtù* がないということには必ずしもならない。マキアベリの印象=直観主義はこれらの問題を判断するには殆んど役に立たない。終りに *virtù* の反対、またはその欠如を一貫して意味する語または句を欠くので一層困難が加

わる。精ぜい各ケースを吟味してこの著者の意見を研究し、最も明白に *virtù* 最少の人物の見取表を作成することである。

はじめに古代人の中からこのような人物をいくつかの部類に分けることが出来る。まず、第一にマキアベリがたびたび批判している古代の僭主達である。即ち、アテネのペイトラトス、エピルスのアリストテムス、スパルタのナビス、アグリゲンツムのファラリス、シラクサのディオニシウス2世である。(Disc., I, ii, 98—99; et al.) しかし既に述べたように僭主は必ずしも皆 *virtù* を欠くのではなく、例えばアガトクレス、セプティミウス・セベールス、フェルモのオリベロットの例外がある。(Princ., VIII, 28—31; et al.) これら両者の相異は後者の人びとは敵を撃破して、強力にして精力的で勇敢な指導者であることが証明されたということのようである。アガトクレスとセベールスはいずれも終りを全うした。古ローマ最後の王タルキニウス・スペルプスはマキアベリによれば殆んど *virtù* のない僭主であったことは確かである。(Disc., III, ii, 314—315; et al.) ロムルスの後継者ヌマ・ポンピリウスは最高の *virtù* はなかったが共和国ローマに重要な貢献をした善王である。古ローマ以外の国王、例えばソロモン、レハベアム、スルタンのバザレートなど *virtù* はないが善良な平和人であり、レハベアムを除いてはいずれも「*virtù* ある支配者」の好運な後継者達である。(Disc., I, xix, 143—144) たとえ正統な後継者であっても「*virtù* を持った指導者や人民」と無益に抗争したことのある専制君主、例えばリディアのクロエスス、ペルシアのダリウス3世、シリアのアンティオコス4世、マケドニアのフィリップ5世、およびその子ペルセウスには殆んど敬意を払ってはいない。(Princ., III, 10; et al.)

次の部類にはいるのは共和国の顛覆を計ったローマ市民、例えばユニウス・ブルトゥス、スプリウス・マエリウス、十人会(Decemvirate)

のアップピウス・クラディウスとクィントス・ファビウスである。(Disc., 1, xxxv, 168—169; et al) コリオラヌス, マリウス・カピトリヌスおよびユリウス・カエサルは皆反逆の罪を着せられたけれどもしかし *virtù* がある。(Disc., 1, viii, 113, et al.) 戦場で無能を暴露した市民達, 例えばセルギウス, ビルギニウス, パッロ, M. ケンテニウス・ペヌラ, ルキウス・ミヌキウス, マルクス・ミヌキウスもこの部類にはいる。(Disc, 1, xxxi, 160—161) ハンニバルに対して戦術的にははるかに優れたファビウス・マキシムスはしかし「*virtù* の人」とはいわれない。(Disc., 1, liii, 200—201; et al)

ローマ皇帝が最後の部類にはいる。(Princ., XIX, 62—67; et al.) そのうちマルクス・アウレリウスとセプティミウス・セベールスは「*virtù* ある人」に指名されている。その他の皇帝は善悪の語で記されている。善帝にはガルバ, チットス, ネルバ, トラヤヌス, ハドリアヌス, アントニウス・ピウス, マルクス・アウレリウス, ペルティナクス, アレクサンダー・セベールスがある。マルクス以外に誰が *virtù* あるかは不明である。悪帝にはネロ, カリグラ, ビテリウス, コモツス, ユリアヌス, セプティミウス・セベールス, カラカラ, マリウス, ヘリオガブルス, マキシムスがある。

さて, マキアベリがたびたび強調したように *virtù* は近代人の間では非常に稀にしか見られない資質であるから, その分類は簡単のようである。(Princ., XXVI; 83—85; et al.) 当時の幾人かの君主, 例えばフランス王ルイ12世, シャルル8世は明らかに *virtù* の少ない有名な表に入れてよい。次に神聖ローマ皇帝マキシミアン1世 (Princ., III, 6—7; et al.), スペインのフェルジナンド5世, フランスのフランソワ1世, イングランドのヘンリー8世は全くゼロである。(Princ., 1, 5; et al.) 法王の大多数, 特にアレクサンダー6世, ユリウス2世は *virtù* が少ししかない。(Princ., II, 6; et al.) マキアベリは「君主論」の中でレオ

10世を無限の「*virtù* の人」であり, 善人であると賞讃しているが, それは彼一流の皮肉であらう。(Princ., XI, 39) 近代の法王の中ではシクストス4世ただ一名にのみ彼は讃辞を呈していることになる。(Princ., IX, 37)

次には当時のイタリアの君主の大部分の番である。即ち, ミラノのスフォルツァ1族, フェララのデステス, マントバのゴンザゴス, ウルビノのギドバルドス, ファエンツァのマンフレディス, ペサロのマラテスタス, ポローニアのベンティボーリスなどである。(Princ., II, 6; et al.) マキアベリが特に嫌ったのはペルージャのジオバンパオロ・バリオーニ, シエナのパンドルフォ・ペトルッチの如き小僭主である。(Princ., XX, 69, et al.) しかし, 中でもフェルモのオリベロットォ・ユーフレドッチをアガトクレスと比較して, 彼を *virtù* と悪 (*virtù e scelleratezze*) という語で記している。というのは彼は大胆にして野蓄な一撃で政権を奪取して以後は, それに反対であった人びとを叔父と後見人とを含めて一挙に皆追放したからである。(Princ., VIII, 29—31) フロレンス人はマキアベリの手腕にも拘らず貧しい生活をしている。メヂチ家に対する彼の態度は精せい冷淡そのものである。(Princ., IX, 34; et al.) この都市はサポーナロラ, ソデリーニのような善良にして順法心に富む市民を生んだのであるが, しかし当時の腐敗と闘うだけの *virtù* がない。(Disc., 1, xlv, 186; et al.) 当時チエザーレ・ボルジァがイタリア唯一のホープとして現われたが, マキアベリが嘆いたように, まさにその出世の出発点で運命によって斃されたのである。(Princ., XXVI, 83) 最後の部類には軍事指揮官はいる。イタリア人の中では少くともボルジァ, カルマニョーラ, スフォルツァを除けば皆 *virtù* を多く持たないことは明らかである。彼等はただ戦争ごっこをするための仲間作りをするだけである。

以上の分析から N. Wood 教授の結論は次のようになる。即ち, マキアベリの「*virtù* の人」

は先づ危機、困難、好機にあって勝利を収めた戦士である。成功は必ずしも *virtù* の証明とはならないが、しかしもし失敗してもテルモピレーの険のレオニダスやウチカのカトー（小）のように花ばなしく最後を飾らなければならない。そこで次のような人物によって *virtù* は最も典型的に発揮されている。即ち、先づ共和国を建設してこれを維持するか、またはこれを継承して維持する人。次に政権をねらって陰謀を企て、これを奪って保持する人。最後に、軍隊を編成してこれを指揮するか、または既存の軍隊を指揮して共和国を維持し、それを拡大する人である。（*Princ.*, XXIV, 78 ; et al.）

II *Necessità* と *Virtù*

以上の分析からマキアベリは *virtù* を主として戦士をあらわすために使っているので次には戦争および軍事活動に関連づけて *virtù* の検討をすることが必要である。

先づ、便宜上古代人は当代人よりもはるかに *virtù* があるというマキアベリの一般論からはじめよう。マキアベリの解説をとく鍵は怠惰、怠慢、不精 (*ozio*) と必要 (必然) 性 (*necessità*) の両語の関係にあるといつてよい。「ローマ史論」のはじめの箇所では人間の行動は必要性和選択に発すると明言している。（*Disc.*, 1, i, 92—93）人間の行動は必要性によって決定される時偉大な *virtù* があらわれる。都市が極めて肥沃な土地であれば人民に *ozio* を生ずる。

それ故にマキアベリは都市に肥沃な土地を予定するよりもむしろロムルスが選んだように、大人口を養うための便利な位置をすすめている。初期の国家の法律はきびしい自然環境の要求 (必要性) の代役を果すように工夫されるであらう。それによって人為的に *ozio* を防ぎ、反対に *virtù* を増進することになる。賢明な立法者はこのような方針をとるものであるとマキアベリは主張する。その後にも人間は必要性に迫られなければ善行 (*bene*) をしないものだ

というあのはじめの格言を繰返している。（*Disc.*, 1, iii, 100—101）人間は選択の余地ある行動をとる場合、その結果は混乱 (*confusione*) と無秩序 (*disordine*) である。飢餓と貧困こそ人を勤勉ならしめ、法律はまた人を善人 (*buoni*) たらしめる。それ故に *virtù* を生み出す必然性 (*necessità*) は自然環境または巧みに制定され、かつ厳格に執行される法律という人工品から生ずる。いずれの箇所でもマキアベリは *virtù* を日常の徳行 (*bene, buono*) と同一視しているのでその反対には悪 (*vizio, cattivo*) ではなく、*ozio* をおいている。それ故にこの必要性の本論には *virtù* の語は見られないのである。（*Disc.*, III, xii, 351—354）しかし、例えば賢明なる指揮官はその部隊を断乎勇敢に戦うか、壊滅するかの緊迫状態 (*necessità*) におくであらう。そうすれば指揮者は当然その敵をまた同様な状態におかないように注意するに違いない。この場合にはマキアベリは徳行を命がけの大胆にして勇敢な行動と同一視していることは明らかである。

マキアベリはもしローマが平和 (*quieto*) であつたならば一層弱かつた (*più debole*) であらうから偉大と栄光を達成しなかつたであらうと記している。（*Disc.*, 1, vi, 107—109 ; et al.）さらにまた、もし国家が天帝に恵まれていて戦争に巻込まれないならば *ozio* が人民を弱体化するか分裂させるであらうと付言している。ここにも *virtù* の語は一字もない。マキアベリは本来 *virtù* とその反対の *ozio* を論じようとしていることを明らかにするためには「黄金のロバ」 (*Asino d'oro*) と「フロレンス史」 (*Istorie Fiorentine*) の中のそれに対応する箇所を参照しなければならない。前者の中でマキアベリは *virtù* は平和 (*tranquillità*) を生み、平和から *ozio* 即ち国家と都市の破壊者が生ずると論じている。（*Asino d'oro*, V, 831）*virtù* は常に市民社会の混乱期に (*disordine*) 回帰して秩序を回復する。万物は不安定であるが故にこの循環は当然繰返されるであらう。

「フロレンス史」の中にも平和 (quiete) は virtù から生じ、平和は ozio を生ずるという主張がある。(Istorie Fiorentine, V, i, 773) 混乱と滅亡は ozio の結果である。しかし滅亡から秩序が生じ、同時に栄光 (gloria) と好運 (fortuna) を招く virtù も生れる。

マキアベリの趣旨は次のように要約される。即ち、**必要性**こそは virtù を生む。戦争は**必要性**を生む条件である。戦争がなければ人民は怠惰となり衰弱し、柔弱となって遂には virtù を失う。法律は人びとを勤勉ならしめ、豊かにし、かつ権威を尊敬せしめる一種の**人為的必要性**であるが、しかしそれは人びとを virtù にすることでは戦争の**必要性**の代用品には決してなり得ないとマキアベリは主張する。法律を制定し、これを適用して執行するのは常に人である。法律がどうして自から立法者を賢明にし、用心深くし、また役人を活動的にすることが出来ようか。virtù, necessità と戦争との関係を明らかにするためには、この問題に関するマキアベリの唯一にして完全明快な「戦術論」の一部にふれなければならない。(Arte de' guerra, II, 392—396) この箇所は「ローマ史論」の第二篇のはじめにある「善悪はおよそ平等に散布しているが、ある時代には善は特定の民族、国家、地域に集中する傾向がある」という序文の解説となっている。その用語は善 (buono) と悪 (cattivo) である。ところがその観念をさらに追求しながら「戦術論」ではマキアベリは buono の代りに virtù を用い、virtù ははじめアッシリアに集中し、ついでメディアに移り、さらにペルシアからイタリアに入った。ローマ帝国崩壊後には virtù はフランス、回教諸国、ドイツの数ヶ国に分散したという。このように「戦術論」では全篇を通じて buono ではなく virtù が用いられているが、virtù は古代世界に絶対に集中したこと、および当時に較べて古代にははるかに大多数の有徳者がいたと説明されている。「戦術論」の中のこの箇所でのマキアベリの virtù の用法から考

えれば、「ローマ史論」の中の問題の buono は単に日常道徳的な善を指すための語ではないことが一見してわかる。これも彼の語句の不正確な用法の一例である。

さて、「戦術論」の論議は古代ヨーロッパには(特にイタリア、ギリシア)アジア、アフリカよりもはるかに多数の名将がいたという文章で始まる。アジア、アフリカには一・二の大王国と少数の共和国しかなかったのに対して、ヨーロッパには少数の王国と無数の共和国があった。有徳者の出る条件は多数の国家の存在ということである。少数の国家しか存在しないならば有徳者も少数である。さらに人が virtù を発揮出来るのはただ主権者のもとで発奮させられる場合だけである。しかるに君主はその臣民の virtù を恐れ、共和国ではその市民の virtù を是認するが故に王国よりも共和国が多い場合、特に共和国が多数の場合には多数の有徳者が輩出するに違いない。それでは多数国の存在が何故「virtù の人」の多数の条件であるのか。これに対してマキアベリはもし国家が多数であれば紛争、論争、生存競争はわずか少数国しかない場合よりもはるかに激烈であらうと説明している。不断の緊張と戦争状態にあっての存立には virtù を**必要**とし、それ故それは是認され表彰される。他国からの不断の脅威にさらされている国家はすべて軍紀と軍隊を維持しなければならない。それ故に virtù は戦争と防衛の**必要性**の結果であり、また共和国の多数の結果でもある。

ひとたびローマが世界を征服してからは有徳者は次第に少なくなった。単一の帝国が多数の小共和国にとって代った。平和が確立されてからはローマ人はいずれの新しい被征服民族の virtù をも奨励したり、また表彰することに熱心ではなくなった。ローマが腐敗して来るにつれて全世界が腐敗し、帝国の崩壊と共に各地域の本来の virtù も全く失われてしまった。

さらにマキアベリは古代イタリア、ギリシアに virtù が横溢していたもう一つの決定的要因

を力説している。これによって必要性(necessità)とvirtùとの密接な関係を明快に論証する。即ち、古代人の生活様式(modus vivendi)は近代人のそれとは著しく異っていた。その理由は両時代の宗教の相異、即ち異教とキリスト教の相異である。異教はキリスト教が戦争を人間的にした近代世界におけるよりもそれだけ強く自己防衛の絶対的必要性を古代人に要求した。というのは異教的価値観は戦争を無惨にして残酷な流血事件とすることに与って力があつたからである。即ち、戦争の敗者は殺害されるか奴隷化され、被占領都市は破壊されて、その住民は離散した。しかし、近代世界ではキリスト教の影響で戦争はそれ程恐ろしいものでも残忍なものではなくなった。諸国民間の紛争は敗者の皆殺しを意味しなくなったので生存は最早困難でも不可能でもなくなった。その結果軍紀と軍隊の弛緩と没落、virtùの減少が起つた。マキアベリはvirtùの激減によって今や運命(fortuna)が人間事象を支配すると結論している。

「戦術論」のこの箇所を中心には異教とキリスト教の価値観の相異がある。幸いにもマキアベリはこの問題をまた「ローマ史論」で特別に論じている。(Disc., II, ii, 227-228)この問題がその第二篇で考察されているのは意味がある。というのはそこでマキアベリは専らローマ人の対外的問題、即ち、服属民の処置、軍事組織、戦術の研究にあてている。さらにその第二章は特にローマ人の軍事的優越に注目しながら、ローマの征服はfortunaよりもむしろvirtùによるというマキアベリの先の主張のあとを受けているのである。マキアベリの宗教論は先づ古代人はこの世の名誉と栄光に最高の価値をおいたのに対してキリスト教は世俗的価値を軽視しているという文章に始まる。古代では軍事指揮官や支配者の如き行動人が最も高く評価されたのに対してキリスト教の理想は瞑想者である。勇猛(ferocitas)と勇敢(gagliardia)は異教の特性であり、謙虚(umilitas)はキリ

スト教のそれである。それ故に異教は偉大な精神的人物と身体の強靱さ(forzezza del corpo)を生んだ。キリスト教も持続を強調するけれども、それは勇敢な行為の遂行を激励するのが目的ではなく、苦難に耐えるという目的のためである。近代世界の生活様式(modus vivendi)は主としてキリスト教に由来するが、それは人間を虚弱にし(debole)、骨抜き(effeminate)にしていたずらに悪党(umino scellerati)の餌食たらしめたのである。人間の態度や行動に対するキリスト教の悪影響はvirtù的解釈でなく愚者(vilta)のozio的解釈に原因があつたとマキアベリは主張している。

III Fortuna と Virtù

さてそれではvirtùの本論ともいうべき「戦術論」においてfortunaとvirtùの現実的関連を求めよう。

Whitfieldも指摘したようにマキアベリはvirtùに多くの意味を与えたので、そのうちの一つの意味だけでは適切ではないとして、さらに幾つかの伝統的用法を追求している。しかしWood教授はこの意味の多様性こそはvirtùを特殊な意味に使用することを少しも排除することなく、しかも特殊な意味を使用することを可能ならしめていると考えた方がよからうと次のようにいう。即ち、マキアベリが個人のvirtùについて語る場合には必ずしも特殊な意味を指しているのではなく、ただそれをある方法で使用した場合のみそうであるらしい。例えば先見、自律、堅忍不拔、精神力、志操堅固、決意、目的堅持、決断力、勇敢、勇気、大胆不敵、活力などを見よ。マキアベリがそれぞれ各種の文脈においていろいろな意味をvirtùに結びつけているからといって、それ故に特定の意味を否定することにはならない。意味の相異はあっても、しかもその間に共通のものがあつた、また用法の多様性にも統一性のあることが立証されたならばvirtùの特定の意味について述べることははじめて可能となる。事実これらの種々な

特殊な意味には必ず共通の性格がある。これはかなり注目すべきことである。即ち、そうしてこそはじめてマキアベリの「*virtù* の概念」について公然と語ることが可能であり、その本質を認識して彼の思想の全体的な理解を一步前進させることが出来よう。そうすればその特定の意味をつかむ手がかりとしては先づはじめにマキアベリは *virtù* を戦士のものとしていること、次には *virtù* と戦争との関係についての解説であらう。

さて、マキアベリが個人の *virtù* について述べる時には常に戦闘中の兵士によって最も典型的に発揮される行動様式のことを考えていたらしい。戦闘、戦争は勝利を獲得するためには、最も厳しい困難と身体的危険の急迫に直面し、かつそれに耐え抜いて克服すべき最も不安定な高度に流動的な状況である。戦争はマキアベリにとっては *virtù* と *fortuna*、即ち、すべて勇敢なものと同様なく気まぐれなものすべてとの間の葛藤の原型であり、また男性的合理的支配と女性的不合理性との闘争である。戦争は人間の体力、智力および特にその性格の最高の試練である。戦争は兵力と詭計と説得とが常に機動的に結合されていなければならない一つの総合芸術である。戦争では最善の計画でも裏切られる。細心にして巧みな用兵によってこそ不測の変事に対応することが出来よう。確実な勝利といえども突然の破滅の可能性となるかも知れない。戦闘が不利になったり、危険が増大したり、時間切迫の時とか、このような絶望的瞬間に指揮官の *virtù* が試練にかけられる。指揮官の性格、自信、意志力、勇気が頭脳や体力よりもはるかに重要となる。詭計や小手先の器用さは士気喪失の場合には役に立たない。圧倒的な敵を向うにまわしては指揮官は慎重に立てた作戦計画でも放棄して、断乎として大胆不敵な即決によってその部隊を奮起させねばならない。こうして幾度か偉大な将軍によって敗北から勝利が克ち得られたことであらう。また、たとえ敗れても幾度か道徳的勝利と栄光が彼に帰

したことであらう。

このような戦争の性格はまた特殊な非軍事的状況のものであるとマキアベリは確信している。建国者、君主、高官、政治的反逆者は戦争と同じ性格をもつた場合での主役とってよい。この場面での成功は勝利戦士が戦場で発揮したのと全く同じ資質＝能力にかかっている。まことに政治は一種の戦争であり、そして市民社会は本来権力をめぐる個人、政党の戦場である。市民とその都市の敵との関係を記述するために使った敵、味方という伝統的な区別をマキアベリは今や市民仲間の関係に適用する。市民生活のモデルは常に軍隊生活であり、市民的指導力のモデルは常に軍事的なそれである。新しい共和国の建設、腐敗国家の改革、政府顛覆の陰謀、反乱の予防はマキアベリの判断によれば基本的には戦争状態である。そこで *virtù* は現実の戦争や政治と対比される戦場ともいべき状況の下に最も鮮明に発揮される一連の能力＝資質または行動の型である。マキアベリの政治家 (*politico*) のモデルは戦士である。前者の美德の基準は後者のそれとは殆んど変わらない。

さて、終りに *virtù* に関係ある二・三の問題にふれて稿をむすびたいと思う。先づ *virtù* の源泉の問題である。次に君主の *virtù* と市民のそれとの関係、最後に *virtù* と市民の腐敗との関係である。

君主の *virtù* は生得の自然的資質であるが、それでもなお教育によってつくられる。一方、市民の *virtù* は正しい教育組織と訓練の成果である。これら両者の *virtù* の発現には勿論 *fortuna* が大きな役割を果している。即ち特定の人物が生来抜群の指導能力を賦与されていたり、またその能力によって出世出来るような時代、場所に住んでいるということは運命 (*fortuna*) の仕業である。ある民族が有徳になるか否かは主として *fortuna* にかかっている。いかなる型の市民教育も**必要性**という必要条件がなければ民族の *virtù* を長期にわたって確保し得ないであらう。しかしまた適切な教育と組織

がなければ環境の要求＝必要性が民族を圧倒して滅亡させるか、またはその能力を著しく減殺するのである。さらに必要性は fortuna の結果のこともあるからある種の教育と組織が *virtù* に必須の必要性を発現してそれを維持するのに役立つことになる。人びとが訓練によって戦士となり、生来軍事色にかぶれ、しかも大国たんとする軍国主義的国家に住む限り民族間の戦争や紛争は絶え間がないであらう。

次に指導者の *virtù* と人民のそれとの相違は種類のちがいでではなく程度の問題である。この点はマキアベリの軍事的モデルにふれた際に説明されている。即ち、下士官、兵、準士官、士官、指揮官は皆同一条件の下に同じ軍事活動に従事する兵士であるが故にある共通の資質＝性格を有する。マキアベリの *virtù* の特定の意味は一兵士から偉大な将軍まで、すべての戦士の行動形式を指す。彼等は皆合理的組織である位階制度の軍隊の成員である。指揮官は位階組織の頂点に位する故に、このピラミッド構造の低位にある兵よりもよき兵士であるのが理想的である。実際には必ずしもそうではないが、理論的には位階制度における位置は *virtù* の優劣に相応ずる。それ故に指揮官はその部下よりも優れた兵士であり、部下よりも多くの *virtù* を持つべきである。規律が整った軍隊では *virtù* は頂点から最下級までの全員が指揮し、命令権を執行するという形で発揮される。軍隊は発動機という将軍の命令によってのみ動かされる受動的な機械ではない。指揮官自身命令に従い、これを執行しなければならぬ。こうして位階制度の下方には主導権と命令権の余地を残した自由裁量の領域がある。

一般目標はトップによって決定されるが、戦術は、例えば都市当局によって許容された自由裁量に従って指揮官とその幕僚によって決定される。特定の軍事作戦のために工夫された作戦計画もただ最も一般的性質のものに過ぎず、これを巧みに適用しようとしても戦況の変化に応じて実際には修正され、また破棄されることも

ある。その場合、指揮官と部下がその自由裁量権をいかに利用するか専らかかっている。この際にこそ全兵士、即ち指揮官と部下の先見、目的意識、決意、気力、勇気即ち *virtù* が最大の試練にかけられる。作戦全体を起案、計画して指揮をとる指揮官の *virtù* は優勢を保った強敵に対して戦線の一角で攻撃を発起立案して指揮をとる部隊長の *virtù*、その計画を実現する兵士の *virtù* よりは大偉大ではあっても類似のものである。これと同様に秩序ある共和国にあっては市民の全階層はその指導者と同じくある資質即ち *virtù* を共有するであろう。市民はその業務の遂行という形で、また義務の遂行、公共の福祉への献身という方法でその *virtù* を発揮するであろう。このような市民は盲目的に服従するのではなく必ずある方法で自由権を行使して主導性を発揮するものである。

最後の問題、即ち市民的 *virtù* と腐敗との関係は既に一応解答されたことになる。ある民族は最善を尽して平和に暮らし、権威を尊敬し、公共の福祉に献身しようと思うかも知れない。しかし彼等が活動的で決断力に富み勇敢でなければ、既に有徳でなければ最高の善意も殆んど役に立たないであらう。市民的腐敗は *ozio* の状態であり、*virtù* の衰退である。愛国的で精力的な統一民族は有徳である。その反対は腐敗である。有徳の指導者はケーザルのように腐敗した人民を支配することが出来よう。ソデリーニのような賢明な指導者でも *virtù* を欠く故に腐敗した人民の改革を企てても失敗するであらう。マリウス・カピトリヌスのような有徳ではあるが愚昧な指導者は有徳の人民を支配しようとしても失敗するかも知れない。ある状況の下にあってはヌマのように *virtù* はなくとも賢明にして善良な指導者が有徳の人民を巧みに支配するかも知れない。最後に、マキアベリが当時の歴史に最も鮮明に証明されていると確信したように、有徳でも賢明でもない指導者は腐敗した人民を支配しようとしても成功と安全は期待されない。

The criticism of religion ends with the precept that the supreme being for man is man……(K. Marx 1844.)(tr.)

む す び

マキアベリの時代と思想については未だなお多くの問題が残されているが、これを以て拙稿「マキアベリ研究」(その1-4)を一応終えることにした。今回は J. R. Hale, Machiavelli and Renaissance Italy. 1960. 訳了後に取掛りたい。

稿を終えるに当り終始激励して下さった法文学部西井教授の学恩に対しては衷心感謝の外はない。

補足 マキアベリの幻想自由論

マキアベリは高度な公共精神が発現するにふさわしい条件として主要な要因二つを挙げているようである。それは即ち彼の所謂「宗教」と「自由」である。前者については本稿で簡単にふれているので、ここでは後者について付記することにした。

さきにマキアベリの宗教批判で述べたように古代ローマ風な民族宗教が緊急に国家の求める精力的な奉仕を生み出す効果のあったことは明白である。しかし、マキアベリの所謂「自由」がまた公共精神をどうして生み出すかは余り明らかではない。彼が「自由」を以て直ちに公共精神の一兆候と見做して、それを創造するものであると考えたことも全く明らかである。この場合、彼が「自由」によって正確に何を意味したかを理解することが困難である。

マキアベリが当然強調しなければならなかった筈の「自由」は、それについて述べた彼の言葉から定義するのは容易ではない。しかしそれが一つの複合観念であることは確かである。即ち、「自由」は本質的にはいかなる政治形態、政治様式にもあるのではなく、法の下における生命、名誉、財産の安全にあるかと思われる。彼は万人が「自由な」政治の下で享受する利

益、即ち自分のもとより、自分の婦女子の名誉を思い患うこともなく、自分のものを何らの懸念もなく自由に享受出来ることについて語っている。(Disc., 1, 16) 自由な国家では人びとは自分の子供達は出世して最高の地位にでもつけることを知っている。しかしこのような利益は「自由な」政府即ち共和制のもとだけではなく、君主制のもとでも同じように享受出来ることもある。マキアベリもこの事実に気づいていた。それ故に人民が完全な安全を享受出来るように法律と慣習によって制限された君主制下のフランス憲法を賞讃しているのである。(Disc., idid)

このように法および法の尊重によって制限された君主制は全く賞讃に値し、マキアベリはこのような憲法が共和制憲法に劣ると考えた気配は殆んどない。(ただフランスに共和制が不可能なのは共和精神のようなものの欠如のせいであることもほのめかしている。(Disc., 1, 55)) 彼は「自由」の反対を単純に君主制と考へたのではなく、当時のイタリアの公国を考へたのである。それは純然たる専制権力を意味し、君主の気儘を法律と同一視するような「僭主制」である。彼はまた賢明な君主ならば常に法律を尊重するであらうとも述べている。(Disc., III, 5) と云うのは政治がよければ人びとはその他の自由を求めることもないからである。自力で権威を獲得するために共和制を求める人もかなりあるが、大衆はただ生活の安全を求めるものだと彼も云っている。(Disc., 1, 16) それ故にもし君主が公共の安全を保障し、その法律を厳格に執行し、またそれを尊重すれば大衆は充分に満足するであらう。一般人の求める目標である「自由」はただ専ら法のもとにおける安全である。人びとは自分が幸福であることに気づけばそれ以上のものを求めるものではない。

(Princ., 27) 人びとが崇拜するのは自由の名に過ぎない。(Florentine Hist. IV, 1)

しかし、それ以上の自由というものがある。マキアベリは「自由」の語のもとに公共の事物

への参加を考えていたことは明らかである。それでは彼にとって「自由」は程度の問題に過ぎなかったのであろうか。即ち、人びとは政治に対する発言権はなくとも普通に求められる程度の自由はあるであらうが、発言権を得ればそれ以上の自由を得るということで彼の思想を表現出来るものかどうか。むしろ彼の思想はフランスその他の国の場合はどうであらうともイタリアでは安全の「自由」さえも共和政治の下でなければ到底実現しそうにないということであった。「自由」は特別に賢明ではない君主の下では殆んど実現する見込みはないであらう。従来多くの君主のうち賢明であり、善人であった人物は僅かなものであったと彼は述べている。(Disc., 1, 58)

共和国では自由主義的法律は貴族と人民との分派闘争から生まれると彼が宣言しているのは、憲法が民主的であればそれだけ「自由」も大きいということを暗示しているとさえ思われる。(Disc., 1, 4)

「自由」と公共精神との関連については、マキアベリは両者を密接に関連づけていることは全く明らかであるけれども公然たる表現はしていない。しかしその考えはある程度までは明確に出来る。即ち、確乎たる法の下での安全という「自由」によって国家は市民に愛されるであ

らう。というのは国家は市民にその最も求めるもの—安全を与えるからである。即ち、市民の公共精神は市民の利己心という確実な基礎に基づくであらう。しかし大多数の人びとにとっては当然つまらないことである「公共の事物への参加」ということがどうして先と同じ結果を導き出すかということはそれ程明らかではない。恐らくマキアベリはそれが魅力的な幻想を生み出すからであると考えたのであらう。即ち、政府の行動は自分のそれであるという感覚、またいつかはそうなるに違いないという希望を生ずると考えたのであらう。いずれの場合でも彼は愛国心を殆んど専ら共和制的「自由」に関係づけようとしたようである。「自由」は抜群の能力をもった君主の下には実現するかも知れないが、それは非常に稀にしかない。他方、共和国では国家が崩壊に瀕しているものでなければ「自由」は存在するに違いない。公共精神のない腐敗した民族は「自由」を維持することは出来ない。このような民族は奴隷状態からの脱出の途はなく、その国家はただ専ら「君主の如きもの」への畏怖によってのみ維持される。不幸にもイタリア人はこのような民族になったとマキアベリは見たのであらう。イタリアは他の何れの国よりも腐敗していると彼は言明している。

On Machiavelli's Concept of *Virtù*

Asao KIDA

Professor N. Wood remarks that just because Machiavelli may associate the different meanings with *virtù* in different contexts, this does not exclude the notion of a special sense. In other words we can speak legitimately of Machiavelli's "concept of *virtù*", and by recognizing its nature, we can advance our understanding of his thought as a whole.

In the opening of the *Discorsi* Machiavelli affirms that man act either through *necessità* or choice. Greater *virtù* occurs when human actions are determined by *necessità*. The laws for the fledgling state will be designed to serve as a substitute for the *necessità* of a hostile physical environment. Artifice will discourage *ozio*, and hence promote *virtù*.

Machiavelli then stresses another factor, crucial to the existence of so much *virtù* in ancient Italy and Greece. In doing so he clearly reveals the close relation between *necessità* and *virtù*. The mode of life of the ancients differs considerably from that of the moderns, because of the difference between the religion of the two eras, between paganism and Christianity. Machiavelli concludes that the pernicious effect of Christianity upon human attitudes and action has been due to its interpretation by men of *vilta*, in accord with *ozio* rather than *virtù*.

In the *Discorsi* Machiavelli contends that Roman conquests rested more upon *virtù* than upon *fortuna*, the reference being specifically to Roman military prowess. To Machiavelli war is the archetypal contest between *virtù* and *fortuna*, a struggle between masculine rational control and effeminate irrationality. *Virtù*, therefore, is a set of qualities, a pattern of behaviour most distinctively exhibited under what may be described as battlefield conditions, whether actual war or politics provide the context. Machiavelli's *politico* is cast in the mould of the warrior, and the standard of excellence of one is not so different from that of the other.

To an important extent, whether a people are virtuous or not is also dependent upon *fortuna*. Without the requisite conditions of *necessità* no type of civic education will for long secure the *virtù* of a people.

Machiavelli's special sense of *virtù* refers to a style of all warriors, from the simple soldier to the great general. Likewise in a well-ordered commonwealth citizens at all levels as well as the civic leaders will have certain qualities in common, *virtù*. Consequently, civic corruption is a condition of *ozio* and the decline of *virtù*.